

『脈法』文字攷

林 克

一 はじめに

馬王堆漢墓出土の帛書醫書の内、『漢志』方技略・醫經に該當するものを取り上げ、再検討を加えてきた^①。今回はその一環として『脈法』を取り上げる。

まず、本稿で論述に使用する資料の略稱を列記しておきたい。

- 『病法』——馬王堆漢墓帛書整理小組『五十二病法』（文物出版社、一九七九年一月）
- 『帛書』——馬王堆漢墓帛書整理小組『馬王堆漢墓帛書』肆（文物出版社、一九八五年三月）
- 『研究』——山田慶兒『新發現中國科學史資料の研究 譯注篇』（京都大學人文科學研究所一九八五年三月）
- 『考注』——周一謀・蕭佐桃『馬王堆醫書考注』（天津科學出版社、一九八八年七月）
- 『壹』——魏啓鵬・胡翔驊『馬王堆漢墓醫書校釋（壹）』（成都出版社、一九九二年六月）
- 《脈書》——高大倫『張家山漢簡《脈書》校釋』（成都出版社、一九九二年六月）
- 『考釋』——馬繼興『馬王堆古醫書考釋』（湖南科學技術出版社、一九九二年一月）
- 『張家山』——張家山二四七號漢墓竹簡整理小組『張家山漢墓竹簡』（文物出版社、二〇〇一年一月）

馬王堆出土帛書醫書は長期間の埋藏によって腐蝕が進み、損傷・脱落が少なくない。馬王堆醫書の十年後に出土した張家山漢墓出土『脈書』は馬王堆醫書の一部と同文を含むが、竹簡に書かれていたため馬王堆醫書に比べて損傷・脱落が少ない。この兩者の共通部分の比較により、馬王堆醫書の損傷・脱落する文字のかなりの部分を推定できる。馬王堆帛書『脈法』について、張家山『脈書』を参照した校訂重釋を最初に行ったのは、江陵張家山漢簡整理小組『江陵張家山漢簡《脈書》釋文』（『文物』一九八九年七期）所掲「馬王堆帛書《脈法》重釋」（以下、「重釋」と略稱）であり、後には『張家山』所掲『脈書』後附（以下、「後附」と略稱）も行った。その校訂重釋の要點は、(1) 缺損文字の解讀、(2) 脱落文字の推定、(3) 『病法』『帛書』釋文が推定した行構成の一部改定、の三點である。

この内、『病法』『帛書』釋文が推定した行構成の一部改定は文字が所屬する行數の變更を伴うので、行論における混亂を避けるために考察を進める前に整理する必要がある。そこでまず「二『病法』『帛書』釋文の再校訂について」において「重釋」と「後附」の行った校訂を検討し、行構成の整理・確定を行う。次いで既に発表した「『陰陽十一脈灸經』文字攷」「『足臂十一脈灸經』文字攷」と同様の文字の考察を行うこととする。

なお、「重釋」と「後附」はほとんど同じであるが、「重釋」は読み取った文字をそのまま記載するだけなのに對して、「後附」は読み取った文字に解釋を加える點と、「後附」は校訂重釋して得られた釋文を帛書『脈法』の行構成にならって行の通し番號を施している點が「重釋」と異なる。

テキストは基本的に『脈法』を用い、必要に応じて『張家山』所掲『脈書』（以下、『張家山本』と略稱）で補う。

『脈法』本文の表示において、□は破断・腐蝕などで脱落する一字を示し、【】はその脱落部分への補充を示し、（）はその直前の文字の解釋を示し、☒は破断・腐蝕などで脱落する字數不明の文字群を示す。論述の過程で使用する用語において、「讀む」とは出土資料の文字の字形をよみとること、「訓む」とはその意味をよみとること、「解す」とは某字であると解釋することである。「脱落」とは出土資料が破断して存在したと思われる文字部分が完全に脱落する状態、「缺損」とは出土資料が破断して文字の一部分が存在し、一部分が存在しない状態、「脱落」とは缺損がなく、文字を明確に認識できる状態の出土資料において、存在が想定される文字が脱落して存在しない状態である。「缺損」には殘存部分から當該文字を想像復元できる場合と、できない場合がある。「不鮮明」とは出土資料の寫眞版で文字がぼやけていたり、黒ずんでいて、字形を明確に認識しえない状態である。

二 『病法』『帛書』釋文の再校訂について

(一) 『病法』『帛書』釋文の行數の變更

『病法』『帛書』の釋文と「重釋」「後附」による校訂重釋の結果とを比較検討するために、『脈法』の文字列に合わせた行の構成を行い、行の通し番號の附いている「後附」をテキストとして使用する。『病法』『帛書』の釋文と「後附」の釋文を以下に並べて示すが、『病法』『帛書』釋文と「後附」釋文にある文字の解釋部分と句讀點は省略した。各行冒頭の「帛72」「後72」などは、「帛」が『病法』『帛書』の釋文、「後」が「後附」の釋文であることを示し、「72」などの數字は行數を示す。各行末の「」内の數字は各行所屬の文字數を示す。

帛 72 以脈灑明教下脈亦聽人之所貴毆氣毆者到下一□□□□□□□□□□〔30〕

後 72 以脈灑明教下脈亦聽人之所貴毆氣毆者到下而【害】上【從煖而去清】〔27〕

帛 73 焉聽人寒頭而煖足治病者取有餘而益不足毆□上而不下□□□□□□□□〔30〕

後 73 焉聽人寒頭而煖足治病者取有餘而益不足毆【氣】上而不下【則視有】〔27〕

帛 74 過之□會環而久之病甚陽上於環二寸而益爲一久氣出脘與肘□一久而□〔31〕

後 74 過之脈當環而久之病甚陽上於環二寸而益爲一久氣出脘與肘之脈而【碧之】〔31〕

帛 75 用碧啓脈者必如式壅種有臙則稱其小大而□□之□□有四【害】臙深〔28〕

後 75 用碧啓脈者必如式壅種有臙則稱其小大而【爲】之【碧碧】有四【害】臙深【而】〔28〕

帛 76 碧輓胃上不逮一害臙輓而碧深胃之過二害臙大【而碧小】□□而大□〔29〕

後 76 碧輓胃之不逮一害臙輓而碧深胃之過二害臙大【而碧小胃之澹澹者惡】〔29〕

帛 77 □□□三【害臙】小而碧大胃之碧□碧□者石食肉毆四害□□□□喜毆□〔30〕

後 77 【不畢】三【害臙】小而碧大胃之碧碧者傷良肉毆四害臙【多而深者上黑】而大【臙少】〔31〕

全體を見て、両者が明らかに異なるのは、『病法』『帛書』釋文が84行までであるのに對して、「後附」釋文は83行までしかないことである。この違いをまず明らかにしたい。

例えば『病法』『帛書』釋文73行の「毆□上」の□が「後附」釋文で【氣】に替わっているように、『病法』『帛書』釋文において空格であった部分が「後附」釋文で【】括弧附きの文字に替わっている所は、帛書の缺落・缺損によって判讀できなかった文字を『張家山本』によって補ったものである。『病法』『帛書』釋文72行の「到下」の「一」が「後附」釋文で「而」に替わり、『病法』『帛書』釋文78行の「臚小」の「小」が「後附」釋文で「少」に替わったような例は、『張家山本』によって帛書の墨痕を見直したところ、「後附」釋文が示すような文字であると判断できたものである。『病法』『帛書』釋文72行の10字空格の2字目が「後附」釋文で「上」と讀まれ、『病法』『帛書』釋文74行の「過之□」の空格が「後附」釋文で「脈」と讀まれたような例は、帛書の不明瞭または缺損が原因で推定できなかった文字が『張家山本』の文字を参照することにより推定できるようになった結果である。

『病法』『帛書』釋文と「後附」釋文は以上のような對應關係にあるが、両者を行ごとに対比すると、72行から75行までは多少の相違はあるものの両者が一致すると言える。76・77行は行頭から三分の二くらいまでは両者の一致が見られるが、行末で違いが見られる。この行末の文字の違いが72行から75行までと同じようなものであるのかどうかは次節に考察を委ね、今はとりあえず行の大半の文字の一致に基づいて両者は大體一致するものと判断する。78・79・80行は『病法』『帛書』釋文の大半が空格で占められ、「後附」釋文との比較が困難であるが、判讀できた部分について見ると、

78行の「臘小」は「後附」釋文の「臘少」との一致が認められ、79行の「走而求之」は「後附」釋文の「走而案之」とのほぼ一致が認められる。しかし、78行末の「□此□」は「後附」釋文の「察殿有」と異なり、79行末の「□□」は「後附」釋文の「盈此」と異なる。78・79行については前述のように『病法』『帛書』釋文の大半が空格であるために明確な対比はできないが、76・77行と同様に行頭から三分の二くらいまでは両者の一致するようであり、行末で違いが見られる。

『病法』『帛書』釋文において文字の脱落の多い80行ほどではないが、81・82・83行は行の後半部をほとんど脱落する。このような事情はあるものの、解讀しえた文字について見ると、80行から両者の最後の行までは同じ通し番號の附いた『病法』『帛書』釋文と「後附」釋文は全く異なる。しかし、例えば『病法』『帛書』釋文の84行「言不可不察殿」と「後附」釋文83行「言不可不察殿」が同じであるというように、『病法』『帛書』の釋文は「後附」釋文の番號の一つ少ない行と一致すると認められる。『病法』『帛書』の釋文80行冒頭の「□者不」も「後附」釋文で一行前の79行「臘者不」と一致すると言えるだろう。

前に行番號の小さい方から両者を對比して79行までは、行末に問題を残すものの、両者の同じ行番號の文字は行の前三分の二がほぼ一致した。今、80行以降を對比して『病法』『帛書』の釋文は「後附」釋文の番號の一つ少ない行と一致し、『病法』『帛書』の釋文80行冒頭は「後附」釋文79行冒頭と一致した。「後附」釋文79行は中央やや下部では『病法』『帛書』釋文の79行と一致することを前に指摘し、冒頭部では『病法』『帛書』釋文の80行と一致することを今指摘した。つまり、「後附」釋文79行は『病法』『帛書』釋文の二行と一致点を持つ。この事實に『病法』『帛書』釋文に見える「第七九、八〇兩行也可能是一行^⑧」という注記を重ね合わせれば、『病法』『帛書』釋文の79行と80行は本來一行であったと判断できる。『病法』『帛書』は解讀の當初から79行と80行が同一行か異なる二行か二つの可能性を推定し、と

りあえず二行とする解讀結果を公表したと考えられる。つまり、『病法』『帛書』の釋文は本來の79行の下部を79行とし、本來の79行の上部を80行として重複表記していたのである。これが「後附」釋文に比べて『病法』『帛書』釋文の行數が一行多い理由である。

帛書『脈法』は『甲本』に後續して記述される前半部と、斷裂して別斷片に記述される後半部に分かれる。『病法』『帛書』釋文に付けられた行番號で言えば、『甲本』釋文は71行で終わり、それに續く『脈法』釋文は72行から始まる。『帛書』の圖版や『病法』『帛書』の釋文によれば『脈法』の前半部において、帛書上部は77行まで、下部は79行まで文字が残り、後半部において帛書上部は80行以降に文字が残り、下部は83行にのみ文字が残る。おおまかに言えば、『病法』『帛書』釋文においては78行から80行までが帛書の斷絶部にあたり、脱落・缺損が激しいために帛書本來の姿の推定が困難であったことにより生じた誤りである。

(二) 『病法』『帛書』釋文の一部行末字句の變更

『病法』『帛書』釋文と「後附」釋文の兩者に關して、明らかな違いがもう一點存在する。(一)で指摘した様に、76～79行については行頭から三分の二くらいまでは兩者に一致が見られるが、行末では違いが見られる。『張家山本』の出土でより完全に近い『脈法』テキストが入手できた結果、從來の解讀とは異なる文字であることが判明したケースや、推定不能文字が推定可能になったケースがあることを(一)で述べたが、76～79行末での兩者の文字の違いはこれらのケースに該當するものであるかどうか、検討しよう。

『病法』『帛書』76行末の「□□而大□」と「後附」76行末の「【胃之澮澮者惡】」は大きく異なり、『病法』『帛書』77

行末の「□□□□喜毆□」と「後附」77行末の「【多而深者上黒】而大【臙少】」も大きく異なる。78行は残存する文字が少ないが、『病法』『帛書』78行末の「□此□」と「後附」78行末の「察毆有」はやはり大きく異なる。これらの相違は、例えば『病法』『帛書』76行末の「而大」と「後附」76行末の「【者惡】」を對比すれば容易に想像できるが、『張家山本』を参照することで読みが變るような、類似する文字間の相違あるいは共通部分を有する文字間の相違ではない。『病法』『帛書』76行末の「□□而大□」は砭石の大小淺深と臙の大小淺深の組合せから生じる四つの害について記述する文脈の中にある。その四つの害を記述する部分を取次に取り出す。

臙深沿輓、胃上不逕、一害。(臙は臙、沿は砭、輓は淺。二〜四害も同じ)
臙輓而沿深、胃之過、二害。

臙大【而沿小】、□□而大□□□三【害】。

臙【小而沿大、胃之沿□。沿□者石食肉毆。四害】。

これを見ると、四つの害の冒頭は二〜四害がともに「臙P而砭Q」に作る。Pは臙の大小淺深、Qは砭の大小淺深である。一害に「而」はないが、文意において二〜四害と違いはなく、「而」が脱落したものと推定できる。二句目において害の名稱をRと表記すると、一・三・四害がともに「謂之R」に作る。末句は序数をSと表記すると一〜四害すべてが「S害」に作る。三害の二句目「□□而大□□□」と四害の三句目「沿□者石食肉毆」を除けば、四つの害は「臙P而砭Q、謂之R、S害」という定型によって記述されると言える。四害には定型に加えて「沿□者石食肉毆」と注が紛れ込んだような字句が見られる点で他の三つの害と異なるが、基本は定型である。とすると、三害の「□□而大□□□」以外は定型を基本とする事が認められるので、三害全體としても定型を基本とすることが推定できる。とすれば、「□□而大□□□」7字において前3字は「謂之R」に違いなく、後4字は四害のように注釋的な記述か、それ以外の

未知の記述か、いずれかである。『張家山本』は「□□而大□□□」が「謂之澮。澮者惡不畢。」であることを明らかにしたが、それは四害と同じ記述様式であった。これによって、『病法』『帛書』76行末の「□□而大□」は『張家山本』を参照することで読みが變るような相違ではなく、本来の76行末の字句でないことが明らかになった。

ここで注目したいのは、行が異なるものの、行末部に同じ文字が存在することである。それは『病法』『帛書』76行末「□□而大□」の「而大」と「後附」77行末【多而深者上黑】而大【膿少】の「而大」であり、『病法』『帛書』77行末「□□□□喜毆□」の「毆」と「後附」78行末「察毆有」の「毆」であり、『病法』『帛書』78行末「□此□」の「此」と「後附」79行末「盈此」の「此」である。この三例は『病法』『帛書』のある行末部の文字がそろって『病法』『帛書』に比べ「後附」の一行後の行に存在するという規則性を持つ。『病法』『帛書』の76～78行末部が「後附」においては一行後にずれて存在するというこの規則性から、『病法』『帛書』の76～78行末部は本来77～79行末部にあったが、何らかの理由で一行前に移動した可能性が想定できる。その理由としては、76行末に本来あるはずの「謂之R + α」が何らかの理由で抜け落ちたということが考えられる。「α」は「澮者惡不畢」や「沿□者石食肉毆」に類するものである。この場合、その理由として書き忘れである可能性は箇條書き部分であるために極めて低い。帛書において「謂之R + α」が書かれている部分は破断による損傷が甚だしいことに注目すべきであろう。帛書の破断によって書かれていた「謂之R + α」が失われたのではあるまいか。

『脈法』圖版を見ると、75行末部と76行末部は繋がっているように見えるから、この推測は簡單には成立しないであろう。しかし、『脈法』圖版をよく見ると、75行末部「膾深」と76行末部「而大□」の間に點狀の縦線が存在する。これは、何かの痕跡であると考えられる。『脈法』圖版で見える限り、墨の痕跡に見える。そうであれば、文字の痕跡であろう。帛書の75行末部と76行末部の間に嘗て文字が存在し、その痕跡の一部が點狀の縦線となって残ったと推定できる。

帛書が埋藏されている間にその部分が折り重なり、重複した部分は朽ちて重複しなかった部分が繋がったようになって残ったか、その部分に生じた断裂が長い埋藏の間に再び接合したか、などいくつかの可能性が考えられるが、憶測の範囲にとどまる。ほぼ確実なのは、75行末部と76行末部の間の点状の縦線は本来存在した帛書76行末の文字の痕跡と推定できるということである。帛書76行末に本来存在した文字とは「膿P而砭Q謂之R+α」の形式に則って書かれた文字の一部、具體的には「後附」76行末の「胃之澹澹者惡」であると推定できる。そうであれば『病法』『帛書』釋文76行以降の行末の文字は、本来は一行後の行に屬す文字と認めることができる。

『病法』『帛書』釋文76行以降の行末の文字は、本来は一行後の行に屬す文字であったとの假説を補強するために説明を加えておきたい。この假説がより確実性を持ったためには、『病法』『帛書』釋文の上記三例とそれに對應する「後附」の字句の一致する範囲が大きいことが望ましい。「而大」の後に『病法』『帛書』は脱落1字を想定したのに對し、「後附」77行末部では「而大」の後に「臚少」2字を想定した。「毆」の後には『病法』『帛書』と「後附」の雙方が脱落1字を想定するので、文字の數や位置の點で問題はない。「此」の後に『病法』『帛書』は脱落1字を想定したのに對し、「後附」79行末部では脱落字を想定しなかった。『病法』『帛書』76行末と「後附」77行末、『病法』『帛書』78行末と「後附」79行末、ここに見られる相違は何か。

『病法』『帛書』釋文が76〜78行末とする帛書の文字はそれぞれの行の上部と聯續せず、ほぼ完全に一行分の文字が残存する74行の末端部から伸びた部分に書かれている。『脈法』圖版で確認できる74行の最末端の文字は「而」であり、『病法』『帛書』釋文は「而」下に一字分の缺落を想定した。同じく74行の左隣りの75行最末端で確認できるのは「深」字の上半分であり、『病法』『帛書』釋文は「深」字の下半分が破斷部にあった筈なので「深」下にそれ以上の文字の缺落を想定しなかったと考えられる。同様に76行「而大」の下の最末端で確認できるのは、判讀できない文字の上部の墨

痕であり、その左隣りの77行の「毆」の下に確認できるのは斜め左上向きの「ヨ」状の墨痕である。「而大」の下の判讀できない文字は勿論、「毆」の下の左上向きの「ヨ」状の墨痕についても、『病法』『帛書』釋文はともに判讀不能とし、1字缺落として扱い、缺落字の更に下にもう1字の缺落を想定することはなかった。77行「毆」の左隣りのやや斜め下に崩れてはいるが「此」と判讀できる墨痕があり、帛書は「此」の直下で破断しているが、『病法』『帛書』釋文は「此」の下に1字の缺落を想定した。行最末尾の文字の有無に關して、『病法』『帛書』釋文は右隣り・左隣りとのバランスを考慮して文字の缺落を想定したり、しなかったりしたことが『脈法』圖版を詳しく眺めることによって理解できる。

これに對し、「後附」釋文は『張家山本』の字句に従うことを第一とする。「而大」の後方で明確に認識できる文字は『脈法』圖版78行中程の「臚少」である。『張家山本』では「而大」と「臚少」の間に18字が存在する。この18字を「而大」の下と「臚少」の上に振り分ける必要がある。既述のように78行は帛書の斷絶部にあつて讀める文字が少なく、讀めた文字の一行の中における正確な位置は把握しがたい。『病法』『帛書』釋文は「臚少」の位置を78行の17・18字目と想定した。この位置が15・16字目あるいは19・20字目である可能性は低いが、16・17字目あるいは18・19字目である可能性は大いにある。「後附」釋文は「臚少」の位置を『病法』『帛書』釋文に倣って17・18字目に想定したと考えられる。そうであれば、78行の「臚少」の上には16字が入り、18字中の残る2字を前の行の「而大」下に貼り附けたと考えられる。ポイントとなる「臚少」の位置決めがこのようなものであるならば、「而大」の下に想定する文字数が1字か2字かということは大いなる問題にはならない。

『脈法』において78行「此」（新しい数え方では末部の「此」は79行）の次の行（80行が消滅前の『病法』『帛書』釋文では81行、「後附」釋文では80行）の上半部は文字がかなり良く残っており、行頭の1文字だけが墨がかすんで判讀

できず、2字目からは判讀可能である。その2字目「虚」と「此」の間に『張家山本』では「獨」1字だけが存在する。そこで「後附」釋文は「此」の下に缺落字が無いと判断したと考えられる。このケースでは「後附」釋文の判断が正しい。『病法』『帛書』釋文の「此」下における缺落1字の想定を検證してみたい。すでに述べたように、『病法』『帛書』が想定する77行「毆」の左隣りのやや斜め下にくずれてはいるが「此」と判讀できる墨痕がある。「毆」字は左肩が上がり右下が下がった形で残っており歪みが大きい。「毆」の左隣りのやや斜め下にある「此」も「毆」と同じ歪みを受けていると考えられる。すると、本来の正常な位置よりも上方に移動している可能性がある。「毆」との位置関係が正常なものであるならば、「此」の下に缺落1字を想定することは正しいが、「此」が本来の位置よりも上方に移動している場合には本来の位置は現状よりも下方であるから、「此」の下に缺落1字を想定することは誤りである。かくて、帛書末端の歪みを十分考慮せずに「此」の位置を決定したために、『病法』『帛書』釋文は「此」下に缺落1字を想定したと推測できる。これは『病法』『帛書』釋文の誤りと判断できるが、致し方ないことである。

行末からの文字の位置が同じである「毆」に關聯する考察を行おう。「毆」の上は、『病法』『帛書』釋文では「喜」、
「後附」釋文では「察」で異なる。『病法』『帛書』釋文が「喜」と讀む文字は、帛書圖版で「喜」とは讀めず、また
「察」とも讀めない。「毆」と讀む字が既述の通りかなり變形していることから、隣接する「喜」と讀まれる字も同様に
變形が著しいためかも知れない。『病法』『帛書』釋文が「喜」と讀んだ字が何であるかは不明とするのが現状における
正しい判断と考える。「毆」の下を『病法』『帛書』は空格とするが、文字が全く存在しないのではない。「毆」の下に
は斜め左上向きの「ヨ」状の墨痕が何らかの文字の上部として残っている。『病法』『帛書』はこれだけでは讀めなかつ
たが、「後附」は『張家山本』を手掛かりにこれを「有」と讀んだ。帛書73行中央部の「取有餘」の「有」の「ナ」は
斜め左上向きの「ヨ」状に作るので、『病法』『帛書』釋文の行末端の「□」を「後附」が缺落字とせず「有」と讀むこ

とは適切な解釋と認めうる。『張家山本』の助けを借りてであるが、この文字の殘痕が「有」と判斷できることは『病法』『帛書』釋文と「後附」釋文の一致が「毆」1字に止まらず、「毆有」2字になったことを意味する。

以上の考察の結果をまとめると、『病法』『帛書』76行末「□□而大□」の「而大」と「後附」77行末「【多而深者上黑】而大【膿】」の「而大」、『病法』『帛書』77行末「□□□□喜毆有」の「毆有」と「後附」78行末「察毆有」の「毆有」、『病法』『帛書』78行末「□此」の「此」と「後附」79行末「盈此」の「此」、この三者が一致すると言える。これは『病法』『帛書』の76〜78行末は、本來は77〜79行末にあったとする假説の眞實性を高めるものである。

なお、一行後にずれることは78行末の「此」までに限定され、その後の行には關係しない。何故なら、『病法』『帛書』釋文が76〜78行末とする帛書の文字はそれぞれの行の上部と連續せず、ほぼ完全に一行分の文字が殘存する74行の末端部から伸びた部分に書かれており、一行ずれる原因は75行と76行の間において、その原因箇所を含む74行の末端部から伸びた部分は78行末の「此」で終わっているからである。

(三)『帛書』の圖版『五十二病方』後附殘片の『病法』『帛書』釋文への組込

『病法』『帛書』の「出版説明」によれば、『足臂十一脈灸經』『甲本』『脈法』『陰陽脈死候』『五十二病方』の五種は同じ帛書に書かれていた。『帛書』の圖版『五十二病方』の後、38〜41頁には前記五種の殘片が載せられている。38頁所載の殘片の内、文字數の多い6片には通し番號が附けられているが、文字數の少ない11片には番號が附けられていない。その17片の中に、『脈法』の一部と思われる殘片がある。通し番號3の左隣りには縦長の通し番號の附いていない

残片が掲載され、その縦長の残片の更に左方に臺形状（左側が底邊）の残片がある。その臺形状の残片には、右側に「此一」、中央に「瘡之」、左側に「病」と「病」下の傍の一部が残る1字、合計6字の存在を確認できる。

この内の「瘡之」は「後附」79行24・25字の「簞之」と對應する可能性がある。「後附」79行の「簞之」の前後は『張家山』の圖版では帛書が斷裂して文字が無い部分であり、『張家山本』に基づいて文字を補った箇所である。『張家山本』は「簞之」を含む一文を「左□□□□案之右手直踝而簞之」に作り、『張家山』の釋文は「簞」について「疑爲簞字之訛、讀作彈」とし、この一文が『素問』三部九候論の「以左手足上、上去踝五寸按之、庶右手足當踝而彈之」と符號すると云う。「瘡」は定母・元部、「簞」は定母・侵部で、「瘡」「簞」は雙聲であり、誤りではなく通假の可能性がある。なお、『張家山』の圖版80頁の當該箇所は筆者には「簞」ではなく「簞」に見える。「簞」であれば帛書斷片の「瘡」と諧聲字で通假が可能である。

79行の一行前、「後附」78行の27字目には「此」がある。この「此」は帛書斷片「瘡之」の右側「此一」の「此」に相當する文字ではあるまいか。この推測が正しい場合、79行の「瘡」は上から24字目、78行の「此」は上から27字目であり、そのような「瘡」と「此」が横一列に並ぶことに不自然さが残る。しかし「後附」78行の文字数は32、79行の文字数は29であるから、78行27字目の「此」と79行24字目の「瘡」が横一列に並ぶことは不自然なことではない。帛書斷片の「此」の下は「一」であるが、「後附」78行の28字目は「不」であって「一」ではない。これについては、帛書斷片は「一」の直下で斷裂しており、「不」の第2、3、4畫「个」状の部分が缺落部にあることは十分可能性がある。

帛書斷片の「病」は「後附」80行23文字目の「病」に相當する文字ではなからうか。文字數29字の79行で24字目の「瘡」と文字數30字の80行で23文字目の「病」がほぼ横一列に並ぶことにやや不自然さが残る。帛書斷片の「病」が「後附」80行23文字目の「病」に相當する場合、80行24字目は「夫」であるから、帛書斷片「病」下の傍の一部を残す

文字は「夫」でなければならぬ。帛書断片「病」下の傍の一部は「夫」の一部と認めることはできない。「後附」80行25字目は「脈」であるが、『甲本』と『脈法』の「脈」は目偏で、傍の上部が「火」に似、下部が「人」に似る。帛書断片「病」下の傍の一部は、上部が「\\」（ダブル逆スラッシュ）、下部が「人」あるいは「へ」で、上下の中央に横に短い「~」がある。上部の「\\」は「火」の上半、「小」の中央縦線と右側の点、中央の「~」は「火」の下半、下部は「人」または「へ」で、「脈」の傍の残痕と判断できる。とすると、帛書のこの行には「夫」はなく、「病脈」であったと推測できる。その場合、「後附」80行に相当するであろうこの行の文字数は29字となり、「後附」79行の文字数と同じになる。帛書の、「後附」80行に相当するであろう行の文字数が79行の文字数と同じであれば、79行24字目の「瘰」と80行23字目の「病」がほぼ横一列に並んでも帛書の文字の大きさは同一ではないので不自然さはない。なお、「ほぼ横一列」と表現したのは、大體横一列であるが詳しく言えば「瘰」より「病」の方がやや上方に書かれているからである。「病」が「瘰」よりやや上方に書かれていることは「病」の位置が23文字目と關係あるかも知れないが、文字が脱落しているので本當のことは不明である。

以上の推論によって、帛書の當該断片は「後附」の78・79・80行の下部の断片と推定できる。

以上、これまでの考察をまとめれば、(1)『病法』『帛書』釋文の79・80行は本來一行であった。(2)『病法』『帛書』釋文の76行末の數文字は脱落していたので『張家山本』によって補う。(3)『病法』『帛書』釋文76行以降の行末の數文字は一行後の行末に本來存在したので、あるべき位置に移動させるが、『病法』『帛書』釋文の81行以降は現狀通りとする。なお、個々の事例については當該箇所て處理し、注記する。(4)「後附」の78・79・80行の下部の断片と認められるものがある。

(1) (4) を釋文に反映させ、新『病法』『帛書』釋文として次に示し、以後の考察に使用する。

- 72 以脈瀟明教下脈亦聽人之所貴毆氣毆者到下而【害】上【從煖而去清】〔27〕
- 73 焉聽人寒頭而煖足治病者取有餘而益不足毆【氣】上而不下【則視有】〔27〕
- 74 過之脈當環而久之病甚陽上於環二寸而益爲一久氣出腋與肘之脈而【習之】〔31〕
- 75 用習啓脈者必如式壅種有臞則稱其小大而【爲】之【習習】有四【害】臞深【而】〔28〕
- 76 習輶胃之不逮一害臞輶而習深胃之過二害臞大【而習小胃之澹澹者惡】〔29〕
- 77 【不畢】三【害臞】小而習大胃之習習者石食肉毆四害臞【多而深者上黑】而大【臞】〔31〕
- 78 【少而深者上黑而小臞多而輶者上白而大】臞少【而】輶【者上白而小】此不【可不】喜毆有〔33〕
- 79 臞者不【可久】毆相脈【之道】左□□□走而求之右【手直踝而】瘳之【它脈】盈此〔29〕
- 80 獨虛則主病它脈曰此獨□則主【病】它脈【靜此獨動則主】病脈【固有動者足】〔29〕
- 81 之少陰臂之大陰少陰氏主【動疾】則【病】此【所以論有過之脈毆其餘謹視當脈之過】〔32〕
- 82 脈之縣書而孰學之季子忠謹學□□□□見於爲人☒
- 83 言不可不察毆〔6〕

三 文字の再考

以脈（脈）瀟明教下、脈（脈）亦聽（聖）人之所貴毆（也）。氣毆（也）者到（荊）下而【害】上、【從煖而去清】

文字の間には1字ないし1字半のスペースがあると推定できる。この推定に『張家山本』の「利下而」に續く「害上從煖而去清」を重ねると、「二」のような文字は「上」の一部と推定できる。

72行下部は斷裂しており斷裂部の扱い方で1字ないし1字半のスペースが存在しないケースも想定できるが、「一」(「而」)の下に文字の一部が見え、これは1字ないし1字半のスペースに書かれていた文字と推定できる。以上により、「荀下而」の下部で『張家山本』の「害上」に對應する部分は「□上」と推定する。なお、下文の「取有餘而益不足也」は「利下而害上」と對應する考え方であると言える。

「到下而□上」の下部は帛書のみでは推定不能である。故に『張家山本』の「從煖而去清」に従う。ただ、「煖」字については、『張家山本』は「煖」に作るが、帛書は次句「聖人寒頭而煖足」で「煖」に作ることから、「煖」とした。この13字、『壹』《脈書》『考釋』は『張家山本』に従う。

(2) 過之脈——「脈」字を、『病法』『帛書』『研究』『考注』は空格とし、『文物』所掲『張家山本』を参照することのできた『壹』以降の注釋には「脈」を補う。『脈法』圖版で、「脈」字の部分は「脈」字であるかどうかは別として、文字がかなり明確に残存する。この字は左上部に雁垂れ状の一畫があり、その下に偏と旁から成る部分がある。偏は「目」の上部に何か着いたような字である。旁はほぼ縦方向の中央で斷絶しているが、上部は中央の斷裂を挟んで「小」の第二・第三畫に似、下部は左半分が左拂い(掠)、右半分は左半分より下方に位置する右拂い(磔)である。『甲本』の「脈」は目偏で、旁は上部が「火」に、下部が「人」に似る。従って、雁垂れ状の一畫を除けば、この字は「脈」と判斷できる。ただ、雁垂れ状の一畫が何を示しているのか不明である。

(3) 氣出郟與肘之脈而砭之——この10字、『病法』『帛書』『研究』『考注』は「氣出郟與肘□一久而□」10字に作り、『張家山本』は「氣壹上壹下、當郟與肘之脈而砭之」14字に作る。「郟與肘」は膝關節部と肘關節部を指し、上肢と下肢

における類似の部位を意味する。『張家山本』の「肘」について『考釋』は「肘」の誤りとし、『張家山』は「肘」と解す。「郟與肘」であれば膝關節部と足部を指す。バランス的には「郟與肘」が優れる。

『脈法』で「肘」の下の空格部分に幾分ばやけているが「卍」状の筆跡を読みとることができる。『張家山本』を参照すれば、「□」は「卍」であり、これは「之」の本字の「卍」と認定できる。「久」と讀まれている箇所は筆跡が明確でなく、上下方向のほぼ中央に断裂があり、隣の右半分が缺損しているという、解讀を困難にする要因が存在する。

「久」の第三畫に當る部分はほぼ明確である。「久」の第一・第二畫の上部、すなわち片假名の「ク」の上部に當る部分は中央断裂の右上に存在するが、殘存する筆跡は「ㄥ」に近く、上部が繋がっていない。第三畫のほぼ中央から斜め左下に伸びる磔の筆跡がかすかに殘る。「久」の左側、偏に當る部分にもばやけた筆跡が殘っており、中央断裂の上は「ㄣ」、下は「ㄩ」と讀める。これらの斷片を『張家山本』と照らし合わせると、上「ㄣ」下「ㄩ」は「目」が中央で横に断裂したものの、「ㄥ」様の痕跡は「火」の第一・第三畫の一部、「久」の第二畫とその中央から伸びる磔は「入」あるいは片假名の「へ」と認められる。帛書の「脈」は偏が「目」であり、隣の上部が「火」字のごとくであり、隣の下部が「入」あるいは片假名の「へ」のごとくである。つまり、「久」と讀まれた文字は「脈」であろうと推測できる。

『脈法』は「砭之」の部分を缺損するので、『張家山本』に従う。「砭」を『脈法』75行以下では上「汜」下「石」に作り、『張家山本』は「砭」に作る。「砭」は『考釋』が指摘するように『玉篇』石部には「砭、刺也、以石刺病也」とあり、『集韻』平聲24鹽および去聲57驗に「砭」の或體と見える。上「汜」下「石」も「砭」の或體と考えられる。

用砭(砭) 啓脈(脈) 者必如式。壅(癰) 種(腫) 有臙(膿) 則稱其小大、而【爲】之【砭(砭)】。【砭(砭)】有
四害、臙(膿) 深【而】砭(砭) 輒(淺) 胃(謂) 上(之) 不速(4)、一害。臙(膿) 輒(淺) 而砭(砭) 深胃

〔謂〕之過、二害。臙（臙）大【而碧（砭）小、胃（謂）之儉（儉）（5）、儉（儉）者惡】【不畢】三【害。臙（臙）小、胃（謂）之碧（泛）、碧（泛）者宕（傷）笈（良）肉（6）毆（也）、四害。

（4）「臙深而砭淺謂之不迷」——『脈法』75行末端、「臙」は1字分の墨痕を残すが不鮮明、「深」字は上半分を残すだけで下半分以下は断裂して存在しない。「臙深」2字は『病法』『帛書』『研究』『壹』『考釋』に従い、『張家山本』と文脈から補う。「臙深」下、『張家山本』では「而」が存在する。『脈法』もこの「一害」以外では「臙」の深淺大小と「砭」の深淺大小との記述の間に「而」が入る。従って、帛書においても「臙深」と「砭淺」の間に「而」が入ることが想定できるが、存在するとすればまさに行の變わり目に位置し、75行末と76行上端の帛書の破斷により確認できない。75行末「深」の上部と右隣り74行末の「而」が上下關係ではほぼ同じ位置に存在する。74行末「而」には「碧之」二字が存在したことが『張家山本』から推定できる。前述のように75行末「深」は右隣り74行末の「而」より斜め下方に位置するから、74行末「而」下に2字が存在することは75行末「深」下に2字が存在することを保證しないが、75行末「深」下に2字が存在することを否定もしない。結局、75行末に「而」字の存在を確認できないので、ここは二、四害の記述に「而」が存在することと『張家山本』により「而」を補う。76行上端の1字目「碧」は上部で横に斷裂し、2字目は偏の上部が「上」で下部が「十」、旁の下部が「戈」であろうことは推測できる程度である。この2字は『病法』『帛書』に従い「碧淺」と解し、『張家山本』により確認する。「淺」は諧聲字で通假する。『脈法』は「之」を「上」に作るが、『病法』『帛書』は「之」の誤りとする。「之」に作る『張家山本』によって確認し、従う。

（5）謂之儉——「儉」は『張家山本』が「儉」に作り、『壹』は「儉讀爲儉、義爲不足」、《脈書》は「讀爲儉、不足、『考釋』は「據李學勤氏意見改定爲斂。：斂字義爲收斂・約束・緊縮。正與本書下一條的“泛”字相互對應。」と云う。

「儉」「斂」ともに「儉」の諧聲字で「儉」と通假しうるし、意味的にも両者が可能である。結局、『考釋』の云う「與本書下一條的『泛』字相互對應」の文字としてどちらが適切か、という點がポイントとなる。「泛」の意味は『考釋』の云う「泛濫」「水漲溢之兒」すなわち「あふれる」「過剰」と思われるから、それと相對する「儉」は「儉」の假借と解するのが適切である。

(6) 傷良肉——『病法』『帛書』はこの部分に「石食肉」3文字を読む。『張家山本』竹簡は縦半分に分れているが、釋文の記す「傷良肉」に讀むことができる。「石食肉」の「石」は恐らく讀み誤りで、文字の兩側に左が長く右が短い縦線があり、二線は上部で繋がっているように見える。それは「𠂔」、「𠂕」あるいは「𠂖」と思われるが、斷定はできない。その冠の下に何か書かれており、「員」のようにも見えるが、定かではない。「食」は「良」に「𠂖」冠をかぶせたものであるが、「石食肉」の二字目は二つの山「𠂖」を讀み取ることができ、「食」ではなく「𠂖」と推定できる。「𠂖」は「良」と諧聲字であり、通假する。『張家山本』が「傷良肉」に作る部分を『脈法』が「M𠂖肉」に作るのと、「良」「𠂖」は通假し、「肉」は同じであるので、「傷」と「M」も何らかの關係が想定できる。「傷」の諧聲字に𠂖に従う碣の省の聲の「宀」がある。『病法』『帛書』はこの字を「石」と讀んだが、上述の「員」のように見える部分が「石」であるならば、この字は「宀」の可能性がある。圖版が不鮮明で確實とは言えないが、取りあえず「石」と讀み、「傷」の通假字と解す。

「傷良肉」は疾病と鍼の間における淺深大小の不一致に起因する弊害を説く『靈樞』官鍼の一文の中に見える。《脈書》『考釋』はその『靈樞』官鍼の一文「疾淺鍼深、内傷良肉、皮膚爲癰。病深鍼淺、病氣不寫、支爲大膿。病小鍼大、氣寫大甚、疾必爲害。病大鍼小、氣不泄瀉、亦復爲敗。」と『脈法』の説く「四害」との關聯を指摘する。適切な指摘である。『考釋』はさらに「一害」から「四害」の「膿」「砭」の淺深大小と官鍼の「疾病」「鍼」の淺深大小とを對應

させ、次のような組合せを設定する。

「膿深而砭淺、謂之不還」と「病深鍼淺、病氣不寫、支爲大膿。」

「膿淺而砭深、謂之大過」と「疾淺鍼深、内傷良肉、皮膚爲癰。」

「膿大而砭小、謂之斂。斂者、惡不畢」と「病大鍼小、氣不泄瀉、亦復爲敗。」

「膿小而砭大、謂之泛。泛者、傷良肉也」と「病小鍼大、氣寫大甚、疾必爲害。」

この組合せは淺深大小に關して「膿」が「疾病」と、「砭」が「鍼」と、きれいに對應して説得力を感じるが、「傷良肉」という同一語句が對應していない缺點を持つ。また、「大過」は「大甚」と同義であり、「惡不畢（惡||病あるいは病の氣がなくならない）」は「病氣不寫（病の氣が排出されない）」とほぼ同義である。これらを對應させると次のような組合せができあがる。

(a) 「膿深而砭淺、謂之不還」と「病大鍼小、氣不泄瀉、亦復爲敗。」

(b) 「膿淺而砭深、謂之大過」と「病小鍼大、氣寫大甚、疾必爲害。」

(c) 「膿大而砭小、謂之斂。斂者、惡不畢」と「病深鍼淺、病氣不寫、支爲大膿。」

(d) 「膿小而砭大、謂之泛。泛者、傷良肉也」と「疾淺鍼深、内傷良肉、皮膚爲癰。」

「膿」「砭」の深淺が「疾病」「鍼」の大小と、「膿」「砭」の大小が「疾病」「鍼」の深淺と對應して、上記『考釋』の組合せに比べてねじれがある。その點で『考釋』の組合せより劣る。しかし、(b)の「大過」は「氣寫大甚（氣が漏れることが甚だしい）」と、(c)の「斂者、惡不畢」は「病氣不寫」と、(d)の「泛者、傷良肉也」は「内傷良肉」とそれぞれ良く對應する。(a)に關しては、『考釋』の組合せに比べて對應が特に良くも悪くもない。良く對應するものの割合から言つて、後者の組合せがより適切な組合せであることは明らかである。恐らく砭石の技法を鍼の技法に應用するとき

(それはこの『脈法』より後の時代)、先に述べたねじれが生じたものであろう。その原因については、未詳である。また、砭石の深淺と癰疽の大小については、『靈樞』九鍼十二原篇に「故鍼陷脈則邪氣出、鍼中脈則濁氣出、鍼大深則邪氣反沈。」と癰疽以外にも擴大した例が見える。

臞(膿)【多而深者、上黑】而大、【臞(膿)少而深者、上黑而小。臞(膿)多而淺(淺)者、上白而大。】臞(膿)少而淺(淺)【者、上白而小。】此不【可不】察毆(也)(7)。**【有】臞(膿)者不【可久(灸)】毆(也)。**

(7) 察也——『病法』『帛書』はこの部分に「喜也」2文字を読む。『病法』『帛書』が「喜」とする1字目の最下部の「口」は單に「一」かも知れない。1字目で明確なのは「豆」あるいは「豆」の古字「豆」に似る中央部である。『病法』『帛書』は中央部の「豆」ないし「豆」状の墨痕に基づいて1字目を「喜」と推定したものと思われる。『張家山本』は「察也」に作る。「察」には「簪」に作る古字があり、この古字が書かれていて、それが崩れた場合には「喜」の下半と「簪」の下半が似たものになることが豫想される。ただ、83行には明確に判別できる「察」が書かれており、こちらだけ「簪」と書くことは、あり得なくはないが可能性は低くなる。つまるところ、1字目が何字であるか判定できないが、『張家山本』に従い、「察」が變形したものか、あるいは「察」の通假字であろうと推定する。1字目は歪みが大きく、一見したところでは「毆」に見えない。よく見ると、斜めに傾き、偏の「医」が壓縮され歪んだ「毆」であろうと想像できる。

相脈(脈)【之道、】左【手上踝五寸】疋(所)案之(8)、右【手直踝而】痺(彈)之。【它脈(脈)】盈、(9)此

獨虛則主病、它脈(脈)滑、此獨【澀】、則主【病】(10)。它脈(脈)【靜】、此獨動(動)、則主【病】。脈(脈)【固】有動(動)者、【肝】之少陰、臂之大陰少陰。氏主【動(動)、疾】則【病】。此【所以論有過之脈(脈)】(【斃(也)、其餘謹視當】脈(脈)之縣(11)、書而孰(熟)學之。季(孝)子(12)忠謹、學□□□□見於爲人□□□□□□、言、不可不察(也)。

(8) 左手上踝五寸所案之——『病法』『帛書』『研究』『考注』は「□□□□□□走而求之」10字に作るが、10字は概數であって嚴密な數値ではない。『張家山本』について、『張家山』は「左□□□□□□案之」8字に作り、8字は圖版からみてほぼ間違いない。『考釋』は「左」の下部に5〜6字の缺損があるとし、『太素』卷一四「診候之一」^④に基づいて「手上去踝五寸」6字を補い、「寸」下に「而」字が脱落するとして、「左手上去踝五寸而按之」10字に作る。『素問』三部九候論の新校正^⑤所引の『甲乙經』と全元起本『素問』は「以左手足上去踝五寸而按之」に作る。これらを踏まえて、改めて『張家山本』を見ると、「左」の下は「手」のようである。『張家山本』で残る解讀不能の4字は、『太素』の「上去踝五寸而」や『甲乙經』などの「足上去踝五寸而」から文脈を維持するための不可缺の文字を選ぶと「上踝五寸」となる。以上を纏めると、『張家山本』は「左手上踝五寸案之」であったと想定する。

以上を踏まえ、『馬王堆本』の「□□□□□□走而求之」を再考する。『帛書』の8頁圖版の左側に帛書の破斷線があるが、その破斷線に接する行は上三分の一が77行、その下で帛書の半分より少し下までが78行、残り部分の上半分が79行、下半分は缺落部である。残っている79行の一番上の字は、不明瞭で判讀できない。2字目は上部に「二」らしい痕跡が見え、下部には「上」らしいものが見える。「二」らしい墨痕は「走」の「土」、「上」らしい墨痕は「走」の「止」すなわち「止」に相當すると『病法』『帛書』は想像したのであろう。上「二」下「止」は『帛書』所收『合陰陽』132

簡の「足」上半の「口」が「凵」に似ることから、「足」の可能性もある。また『馬王堆簡帛文字編』^⑥所掲の「疎」「胥」「楚」において偏旁冠脚の「疋」は「足」に作り、『説文解字』二篇下・疋部「疋」の説解に「古文以爲詩大雅字、亦以爲足字」とあることから、上「二」下「止」は「疋」の可能性もある。圖版で『病法』『帛書』が讀む「而」の第一畫が見えない。第一畫があるとすれば、第二畫「ノ」の上方に「ノ」と離れた「一」（「走」の下部の「止」の第四畫にあたるもの）が見えるが、これは第二畫以下と離れすぎている。「而」の第二、三、四畫に當る「冂」状の墨痕は「宀」ではあるまいか。圖版の「而」の第五、六畫「||」は短い横の二畫が加わった「廿」に見える。そうであるならば、「而」と讀んだものは「安」の可能性もある。また、「求」は「木」を讀み誤った可能性もある。つまり、「而求」は「案」一字と推定できる。「而」の第六畫に相當する部分を右下に長く引くところは『戰國縱橫家書』^⑦108行「案」字に似、また全體的には雲夢秦簡『語書』^⑧7簡の「案」字に似ており、これは「而求」を「案」とする推定の妥當性に對する傍證となる。4字目は「之」である。2、3、4字目が「走案之」「疋案之」あるいは「疋案之」であるならば、先に推定した『張家山本』の「左手上踝五寸案之」に「走」「足」「疋」を加え、『馬王堆本』の「□□□□□□走而求之」は「左手上踝五寸走案之」「左手上踝五寸疋案之」または「左手上踝五寸疋案之」であると想定する。

この場合、「走」「足」「疋」の意味が問題となる。「走」の通常の意味では通じがたい。「走」の通假字に「湊」がある。『説文解字』二篇上水部に「湊、水上人所會也、从水奏聲」とあるが、朱駿聲は『説文通訓定聲』需部第八「湊」で「按上人二字當爲辰字之形譌」とし、その證左を擧げている。妥當な説と認め、従いたい。「辰」は「水之衰流別也」、すなわち「水流が斜めに枝分かれするもの」であり、分かりやすく言えば「水脈の支流」である。とすると「湊」は「水脈の支流が集會するところ」を意味し、さらに「水脈が集會するところ」までも意味しよう。これを人體に當てれば、「湊」は「脈の集會するところ」となり、「左手もて踝を上ること五寸の走、之を案ず」は「左手で踝の五寸上

の脈の集まる所を押さえる」を意味する。『説文解字』二篇下足部に「踝、足踝也」とあり、踝はくるぶしのこと。『素問』三部九候論の林億等の按語に引く全元起は前述の「以左手足上去踝五寸而按之」に對して「内踝之上、陰交之出、通於膀胱、係於腎、腎爲命門、是以取之、以明吉凶」と注す。これに依れば、くるぶしは内踝であり、「上踝五寸湊」は内踝の上方で足の三陰脈が集會する三陰交穴から出たものが膀胱や腎に連絡するところとなる。

「足」はもとより、「疋」にも足の意味がある。「足」「疋」の前後は足のことを述べるものであるから、足を意味する「足」や「疋」でも良さそうである。ただ、「左手もて踝を上ること五寸の足（あるいは疋）、之を案ず」では文意に明確さを缺き、下肢の意味の「足」「疋」では通じがたい。『管子』卷一九弟子職に「問所何趾」とあるものを『説文解字』二篇下足部「疋」字の説解に引いて「弟子職曰、問疋何趾」という。「疋」は心母・魚部、「所」は山母・魚部で、2字は準雙聲・疊韻で通假する。「疋（≡所）」であれば、「左手もて踝を上ること五寸の疋（≡所）、之を案ず」となり、「所」が部位を意味するのか、概數を意味するのかどちらであるか不明であるが、意味的には十分通じる。「足」にはこの部分に適合する通假字は無いようである。2字目は「走」か「疋」かのいずれかと考えられるが、どちらであるかを決すべき明確な根拠が見あたらない。「某寸所」という表現が『素問』『靈樞^⑨』に見えることを根拠に「疋（≡所）」と解する。

(9) 右手直踝而彈之。它脈盈此、——79・80行を單純合體した新79行でこの部分は9字缺落となるが、9字は概數である。『張家山本』は「右手直踝而簞之。它脈盈此」11字に作る。『帛書』の8頁圖版の帛書左側破斷線に接する79行の一番下、つまり「走案之」の下には『病法』『帛書』が判讀不能の爲に缺落字に含めた一字の墨痕がある。その一部に左に開いた「ヨ」状の墨跡があり、『張家山本』を参照すると「右」の「ナ」であろうと推測できる。「右手直踝而簞之」について、『太素』卷一四「診候之一」^④、『素問』三部九候論の新校正^⑤所引の『甲乙經』と全元起本『素問』は「右

手當蹶而彈之」に作る。前章(三)『帛書』の圖版『五十二病方』後附殘片の『病法』『帛書』釋文への組込」で指摘したように「簞之」に對應する文字を残す斷片があり、同じく前章(二)『病法』『帛書』釋文の一部行末字句の變更(以下『病法』『帛書』釋文再校訂(二)と略稱)で述べたように『病法』『帛書』の78行末部の「此」は新79行の末部にあることになる。この三字を除き、残りは『張家山本』に従う。なお、「瘡」については『病法』『帛書』釋文再校訂(二)参照。また、『病法』『帛書』の78行末部は「此□」と「此」の下に不明の1字を豫想したが、『張家山本』に従い、新79行の末部においては「此」下の不明の一字を削除する。「它脈盈此」より後、從來の81行を80行とし、以下同じく一行ずつ繰り上げる。前章(一)『病法』『帛書』釋文の行數の變更」参照。

(10) 獨虛、則主病、它脈滑、此獨澀、則主病。——この行は新80行(元『病法』『帛書』81行)である。この行も文字の缺落が多い。『病法』『帛書』が空格としたものの内、「後附」釋文については『張家山本』によって解讀可能になったものとして「獨」「汨(滑)」「(二つ目の)主」、「張家山本」によっても解讀できないものとして「澀」、缺落字として「(二つ目の)病」、に分けることができる。『帛書』の圖版で二つの「獨」は「犴」をかろうじて確認できる程度であり、「汨」は下部が缺損し、残った旁は四角の中に頭部をやや左に傾けた「T」状の墨痕があつて「汨」には見ええず、二つ目の「主」は文字の左側三分の一位が見える程度で「主」か「生」か判断できない。「獨」は「犴」が共通することを根據に『張家山本』に従い、「主」は「張家山本」に従つて補う。「汨」は「後附」の解讀のとおり「汨」に讀むことができれば、『考釋』が指摘のように『莊子』齊物論『釋文』の「滑、向本作汨」により、「滑」の通假と認められる。しかし、上述の如くその字の旁は本來の旁の上半分が残るだけで、残った旁は「冎」ではないか。そうであれば、缺損した旁の下半分が「肉」であれば「滑」であるし、「口」であれば「渦」となる。「滑」であれば『張家山本』と一致し問題がない。「渦」の場合、見

母・歌部の「渦」と匣母・物部の「滑」とは旁母・旁對轉の關係となり、通假の可能性が無いわけではない。可能性の高い方を取って、傍の下半が不明であるが「滑」と判断する。なお、『張家山本』は「漑」に作るものを「澀」と解す。『考釋』はこれを「衛」に作るとするが、竹簡には明らかに「シ」が存在する。また、『考釋』は「澀」を「漑」に作り、山母・緝部とするが、「漑」は山母・職部であろう。

(11) 脈之縣——『帛書』は「縣」を「玄」と解釋する。古音ではともに匣母・元韻、同音で通假する。『靈樞』根結篇に「九鍼之玄、要在終始」という表現があるが、『太素』『甲乙經』では「九鍼之要、在於終始」と作っており、漢代からこのように「玄」字を使用したか疑わしいため、従わない。『素問』脈要精微論に「故乃可診有過之脈」とあり、王注は「過、謂異於常候也」と云う。^⑩「縣」には「縣隔（へだたる）」の意味があり、ここの「縣」は王注に倣えば「謂縣隔於常候也」ということであろう。つまり通常の状態から隔たること、離れることを意味する。なお、『張家山本』の「過」と「縣」が旁母・歌元對轉で通假しているとも考えられる。一つの可能性として挙げておきたい。

(12) 孝子——『脈法』は「季子」に作る。『病法』『帛書』は次子とし、『研究』『壹』は末子とし、『考注』『考釋』は小子（幼少の者）とし、『張家山』は孝子とする。『老子』18章に「六親不和、有孝慈」とあり、朱謙之『老子校釋』所引の嚴可均『鐵橋金石跋』は紀昀校據永樂大典本が「孝慈」を「孝子」に作ると注記する。「慈」は從母・之部、「慈」の諧聲字「茲」「孳」「滋」は精母・之部、「子」は精母・之部で、「慈」「子」は通假する。「孝慈」なる語句は19章にも「絶仁棄義、民復孝慈」と見える。18章の「孝慈」を、郭店楚簡『老子』丙本は「孝孳」に、馬王堆帛書『老子』甲本は「畜茲」に、同乙本は「孝茲」に作り、19章の「孝慈」を郭店楚簡『老子』甲本は「季子」に、馬王堆帛書『老子』甲本は「畜茲」に、同乙本は「孝茲」に作る。「畜」の古代音に透母・覺部と曉母・覺部の二音があり、曉母・覺部は曉母・幽部の「孝」と雙聲・入陰對轉である。「季」は見母・質部で、「孝」と鄰母であるが、韻部は關聯が薄い。簡帛

文字において、「季」は「李」より「孝」に近い。「季」の二・四・五畫と「孝」の三・四畫はともに「×」状に書かれることがある。この上さらに、「季」の一・三畫が逆「レ」状すなわち「↑」と書かれることがあり、「孝」の一・二畫が人偏「亻」状に書かれることがあって、この場合には「季」と「孝」の違いは僅かな違いである。郭店楚簡『老子』の注釋書の多くが、「季」は「孝」の誤りとするのは一つの妥当な判断である。

『老子』18章は「六親不和、有孝慈」に續けて「國家昏亂、有忠臣」という。この二句の對應という点から見れば、「有孝慈」は「有忠臣」に對應する「有孝子」が相應しい。しかし、上記のように「有孝子」に作るのは紀昀校據永樂大典本だけである。19章は「絶仁棄義、民復孝慈」であるから、文脈から「季子」ではなく「民復孝慈」が相應しい。にもかかわらず、「季子」に作ったということは「孝慈」「孝子」「季子」がほとんど區別無く使用されていたと推測できる。先に「季」は「孝」の誤りとするのは一つの妥当な判断と述べたが、それ以上に「孝慈」「孝子」「季子」三者の混用がより一層あり得べき原因と考える。

四 おわりに

馬王堆漢墓醫書が出土して十年後に張家山漢墓醫書が出土したが、この十年間に馬王堆漢墓出土醫書關聯の多くの研究が行われ、その第一次研究とも呼べるものがほぼ完結した。當然の事ながら、第一次研究は公刊された馬王堆出土資料を基に行われたが、その資料は、馬王堆漢墓帛書整理小組の手になる出版物であった。馬王堆出土醫書の研究者はその出版物を手掛かりに研究を進め、多くの成果を生み出してきた。馬王堆醫書のテキストに關しても十年間の研究の積み上げによりほぼ確定した段階に到達していたが、張家山醫書の出現は、『脈法』に關してはほぼ確定したテキストの

構成の變更を要求する結果をもたらした。先行研究によって一旦確定したテキストを改める場合は、十分な配慮の下に改めるべきものと考ええる。それが無ければ、先行研究と今後の研究の間に大きな齟齬が生じる虞がある。本稿は『病法』『帛書』が定めたテキストと、「重釋」「後附」が校訂重釋したテキストとの關聯附けを明確にすることに重點を置いたが、このような考えに基づくものである。考察を終え、その目的は一應達成できたのではないかと思っている。

注

- ① 『陰陽十一脈灸經』文字攷（大東文化大學『漢學會誌』42號、平成一五年三月）および『足臂十一脈灸經』文字攷（大東文化大學『漢學會誌』43號、平成一六年三月）。
- ② 『病法』23頁のふよび『帛書』17頁の注〔四〕。
- ③ 『脈書』は本文を「利上而害下從煖而去清」に作るが、校四で「利下而害上、從煖而去清：『脈法』作『到下一□□□□□□□□□□□□』とある。従って本文の「利上而害下」は「利下而害上」を誤ったものと推定できる。
- ④ 『仁和寺本 黃帝內經太素（中）』卷14「診候之一」卷首の缺名篇10頁「以左手上去踝五寸而按之」（オリエント出版社刊『東洋醫學善本叢書』所收）。
- ⑤ 顧從德本『黃帝內經素問』卷6、12頁右「以左手足上去踝五寸按之」の新校正に「按甲乙經及全元起注本竝云、以左手足上去踝五寸而按之」とある。
- ⑥ 陳松長『馬王堆簡帛文字編』（文物出版社、二〇〇一年六月）足部の「疎」、肉部の「胥」、木部の「楚」。
- ⑦ 睡虎地秦墓竹簡整理小組『睡虎地秦墓竹簡』（文物出版社、一九九〇年九月）所收。
- ⑧ 馬王堆漢墓帛書整理小組『馬王堆漢墓帛書』參（文物出版社、一九八三年一〇月）所收。
- ⑨ 次の五例に「某寸所」が見える。『素問』刺腰痛41「昌陽之脈、令人腰痛、痛引膺、目眩眩然、甚則反折、舌卷不能言、刺內筋、爲二疔、在內踝上、大筋前、太陰後、上踝二寸所」、『素問』骨空論60、「諛諛、在背下、挾脊傍三寸所、厭之令病者呼諛諛、諛諛應手」、『素問』繆刺論63「邪客於足陽躄之脈、令人目痛、從內眥始、刺外踝之下半寸所」、『靈樞』背膂51「腎膂、在十四焦之間、皆挾脊相去三寸所」、『靈樞』衛氣52「足厥陰之本、在行間上五寸所、標在背膂也」。

⑩ 『莊子』齊物論に「置其滑潛」とあり、『經典釋文』卷26「莊子音義上」に「滑、徐、古沒反、亂也、向本作汩、音同」という。『考釋』はこれ以外に、『淮南子』原道訓「混混滑滑」の高誘注の「滑、與汩同」を例として引くが、今本の高誘注は「滑讀曰骨也」に作る。ただ、『正統道藏』所收『淮南子』原道訓は「混混曰汩」に作り、高誘注を「汩讀曰骨也」に作る。

⑪ 『太素』卷10「經脉根結」35頁（注④參照）及び『黃帝三部鍼灸甲乙經』卷2「經脉根結第5」39頁（オリエント出版社刊『東洋醫學善本叢書』所收）。

⑫ 顧從徳本『素問』卷5、1頁右。

（追記）本稿の執筆に當り、本學人文科學研究所學外研究員浦山きか氏から貴重なご教示を頂いた。